

# 経済の未来 ——世界をその幻惑から解くために

L'AVENIR DE L'ÉCONOMIE

ジャン＝ピエール・デュピュイ 著

評・宇野 重規

(政治学者  
東京大教授)

避けがたいことはわかっているが、いつ到来するかはわからない。典型的なのが自分の死だ。自分にとれだけの時間が残されているのか、人間には最後の瞬間までけっしてわ

## 「破局主義」からの示唆

のは本書において、彼が災害問題について提唱する「賢明な破局主義」と、経済の哲学的考察を正面から結びつけている点にある。

資本主義を可能にする条件は、資本主義が不滅であると信じることである。このように説くデュピュイは、

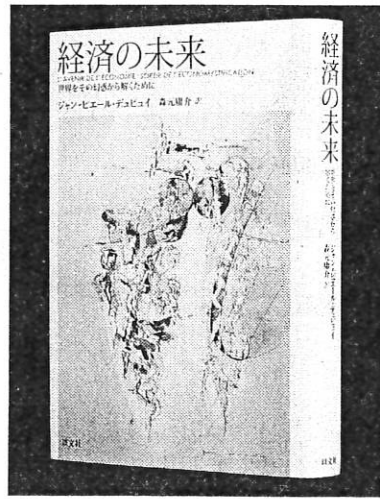
だからこそ経済についての言説では、つねに未来の成長が説かれ、破局が語られないという。

しかしながら、破局の到来が確実であると認めることが、逆説的に最悪の破局を回避する最善の方法であると考える著者は、経済的思考がますます猛威を増し、社会のすべてを飲み尽くそうとしている現状に警告を発する。

デュピュイは問う。破局を認めず、成長を説き続ける経済的思考は、実は自分自身、未来を信じていないのではないか。政治を含め、社会のすべての価値を飲み尽くした経済は、逆に自分をコントロールできなくなっているのではないか。

地球温暖化や巨大災害という破局の到来を認めることなくして、経済は真に道徳的にもならないし、自らを律することもできないという著者の示唆が重い。森元庸介訳。

◇Jean - Pierre Dupuy = 1941年生まれ。哲学者。米スタンフォード大教授。著書に『犠牲と羨望』など。



以文社  
3000円

からない。

災害などの破局も同じだ。特に日本の場合、いつか必ず再び大地震が起きる。私たちにとって運命とも言える破局に対して、どう向き合うべきなのだろうか。

東日本大震災と福島原発事故以来、『ツナミの小形而上学』や『ありえないことが現実になるとき』などの著作で、日本でも注目されているフランスの哲学者デュピュイの新作が出た。テーマは意外なことに「経済の未来」である。

もちろん、著者はつねに経済とは何かを考えてきた哲学者であり、その点では何ら意外ではない。面白い